

## 東西兩洋に於ける自然と人生との關係

著者	戸澤, 正保
雑誌名	龍南會雜誌
巻	161
ページ	1-9
発行年	1916-06-15
その他の言語のタイトル	東西兩洋に於ける自然と人生との關係
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6606">http://hdl.handle.net/2298/6606</a>

## 東西兩洋に於ける自然と人生との關係

教授 戸澤 正保

### 其 一

これは先輩も既に云つてゐる事であるが、西洋に往つて先づ第一に感ずることは、總てが人間臭いと云ふ事である、鬼でも云ひさうな言ひ草であるが實際大抵の日本人は斯く感ずるらしい、之を別の言葉で云ふと自然の香りが殆んどないと言ふ事である、當然の結論として我等日本人の生活には大分自然の香りが高い云ふ事になる、只我等は日本に居る間は此自然の香りに氣が附かぬのである、西洋人は之を指して野蠻の香りと云ふかも知れぬ、併し私はさうは思はぬ、文明の相違だと思ふ、香氣と云ふものは物の實質の分子の發散だとすれば異なる文明が異なる香氣若くは臭氣を放つに不思議はない。

併しいくら西洋でも全く自然若くは自然物が無いと言ふ譯でないのは勿論である、只いかにも人間化せられ若くは人間化せらるゝに都合のよい自然物のみが採用せられ、若くは賞翫せられて居るのである、凡そ此世の中に全く人間の造り出せる物は一つもないのは云ふまでもない、要は西洋人の加工し若くは賞用する自然物は餘りに人間化せられて居ると云ふ事である、餘りに肉感的であると云ふ事である。

例を挙げると先づ衣服である、殊に婦人の衣服になると、矢張り重に絹を用ふるのであるが、日本人は光澤のある絹を嫌ひ、わざ／＼光澤を消して用ふるのであるが、彼等の用ふる絹の第一條件は光澤である、色合もどちらかと云ふ強烈で、そして其形狀になると肉体の形を發揮するやうに、若くは肉体の形を隠さぬやう

にと努むるので、恰かも理想は裸体其者にあるかの如く思はしむる程である、之を日本人の衣服が成る可く肉体の形を崩すやうに隠すやうにと努むるとは正反對で、此處にも人間本位の理想が窺はれる

器物を見ると、材料の金銀たると木竹たるとを問はず、舊態を少しも留めぬ程に加工して、絢爛の美は極むるが、自然の匂ひは全くない、木竹の自然色を貴び形状に於ても成るべく自然の形態を留めんと苦心する我等の器物とは雲泥の差がある、葛を以て土瓶の蔓とし瓢を以て水筒となし、藺草を編みて壘となし、皮附の木を以て床柱となす我等の風流は到底彼等に求め難い

目を慰むる草花に至つても、其賞翫の急處が我等とは大分違ふことは申す迄もない、庭園に至つても同様である、彼等の庭園は自然の山川森林とは大に趣を異にするが特色である、草木土石の配合が自然の配合と甚だ異なる程善き庭園と考へられる、泉水などになると尤も甚だしい、大理石等を以て幾何學的の形状を作り中に彫像を置きて噴水を迸しらす常である、美は美であるが、水は死せる水となるのである、井鉢の中の水が死せるやうに死せる水となるのである、水を活かして作ると云ふのが日本の泉水の秘訣だと聞いて居る瀧を作り小川を作り而して土橋を架けるなどは、皆な水を活かす工風に外ならぬのであるが、そんな自然臭い工事は西洋の庭園に見られない、有名な佛國のウエルサイエの庭園の泉水なども其通りである、併し金と勞力のかゝることは非常であるらしい

次に美術を見ると矢張り此處にも人間本位がよく現れて居る、彫刻は云ふ迄もない事、繪畫に於ても尤もよく描かれて居るのは人間である、人間の肉体である、此點では東洋の美術が如何にもがいても追付かぬ、肉体の研究は道である、併し風景畫になると、コロがよいのターナーが偉いのと云つても支那日本の風景

畫には遠く及ばない、寫實的に美しく描いてはあるが自然の精神と云ふものは出て居ない、西洋畫の自然は矢張り人間界の中に取込まれて居る自然だ、東洋畫の自然は自然の自然である、人間界の外にある自然である、一体に西洋畫には氣韻など云ふ事はないやうだ、蓋し氣韻といふ事は人間が人間を超脱した瞬間に出る一種の閃めきであらう。

かくの如く何事も非自然的人間本位であるから、廣い意味で云ふ肉感的である、其結果か原因か、一体西洋人の感覺は發達して居るらしい、殊に觸覺と嗅覺とに於て然るらしい、尤も五官の或者は野蠻人程異常に發達して居るといふから、觸覺や嗅覺の發達して居るといふのは蠻境を去ること未だ甚だ遠くないといふことかも知れぬ、兎に角觸覺や嗅覺が其刺撃を要求することは我等に比して猛烈である、毛皮の愛寶石の愛などは實は直接間接に觸覺の要求なのである、眼で見て美しとするものの色や表面なども、其少なからぬ部分は觸覺の連想に原因する、彼等の嗅覺も亦少なからず跳躍を極めて居る、化粧品としての香料は勿論飲食物花卉果實も香氣を以て重要な條件としてある、花を賞美するに眼と鼻とを同時に使用するなどは誰も知る事實である、而して其香氣も刺撃性の強い程貴ばれる、東洋では木の皮若くは木の實質より取りたる沈香抹香等を除くの外香料は卑賤として考へられる、麝香や堇の香りは恐らく君子人の卑む處であらう、花の香で賞美せらるるののは恐らく幽谷に咲く蘭の香りのみであらう、然るに西洋人の好む香料は大抵劣性を刺撃するもの様である、要するに何處迄も人間本位である肉感的である。

全体西洋人は其肉体が肉感的に作られてある、色の白さ眉目の齊整、音量の豊富、精力の充實は實に彼等の人種的特兆である、精神は別問題として、形骸は吾人が自然若くは自然物と稱するものと雪と墨程の對照を爲して居る、印度人の如きは精神に於て實に偉大なる人種であるが其形骸は蛙や蜴蜥が自然の一部分なるが如く、いかにも自然の風物中の一部分らしく見ゆる、勿論人間は悉く白も黒も自然の一部分には相違ないのだが、暫く古來の因習に従つて自然對人生といふ見方を立て、云ふのである。

かくの如く肉感的に出來て居る西洋人が肉感的に發達するに不思議はないと思はれる、されば西洋文明の祖たる希臘人を見れば、先づ彼等は現世的の人民であつた、現世的と云つても決して淺薄といふのではない否な偉大なる人民であつたことは斷るまでもない、只だ現世を以てアルフハでありオメガであるとしたのだが此の如き考が人間を肉感的ならしむるに導くべきは明かである、果然彼等が遺した驚くべき文學美術は彼等が肉体の美を如何に讚嘆したかを語つて居る、尤も私の云ふ肉感的とは今の美術家などがいふ挑發的といふ意味でいふ肉感的ではない、希臘人の文明を繼承した羅馬人に至つては、其晩年に現世的肉感的人間本位的の頂上に達した、處へ這入つて來たのが基督教である、これは又極端に現世を排し肉を否定した、希臘羅馬の文學美術は悉く拋棄せられた、そこで西洋人は現世を失つて未來を得た、肉を失つて靈を得た、併し斯の如く極端なる基督主義は肉感的に出來て居る西洋人と容易に調和するものではない、西洋人は基督教に依つて満足を得たとは表面で、裏面は大に煩悶した、現世と未來とは闘うた、肉と靈とは攫み合うた、所謂中世史は或意味で西洋人の肉性が基督教の桎梏を弾ぬ返さうと努力した記録であるとも云はれやう。

而して遂に弾ね返したのが所謂文藝復興である、此運動に依つて羅馬以來封緘されて居た現世と肉とが再び

解放せられたのである、高閣に束ねられて居た希臘拉典の古文學が今更のやうに研究せられ出す、埋められた八百萬の神々の大理石像が掘出されて、新たに崇拜せられ出すといふ始末、由來此方が西歐人には適して居るのだから、非常な勢を以て此運動は傳播し進行した、それから以後の西洋の思想史は基督教の靈と古典傳來の肉との争ひの消長に外ならぬ、別の語で云へば希臘思潮と希伯來思潮の調和運動に外ならぬ、其結果として西洋人は希臘傳來の肉と希伯來將來の靈とを兼ね備へ、茲に完全なる人間となるを得た

併し人間は何處迄も人間である、自然と對抗する人間である、自然の一部分なる人間とはなれぬのである、我々東洋人には人間といふ小圓は自然といふ大圓の中に含まれて居るのであるが、西洋人には此小圓と大圓とが全く離れて居るのである、基督教の靈なるものも、天地萬物を造つた大靈の一部だと教ふるのだから、我々も自然と同じものだといふ結論になるのだが、實際に於ては何處迄も、人間を自然と對抗させて居るらしい。だから我々は人間界が厭になれば、世を棄るとか山に入るとか、乃至風月に嘯くとか云つて、人間といふ小圓から脱け出で、自然といふ大圓の中に入ることが、出来るのだ、西洋人にはそれが出来ぬ、又我々は人間を棄てないでも、此人間界の外には更に自然界といふ宏大な逃場があるといふことを意識若くは感得して居るから、人間界に對して何となくゆとりがある、西洋人程の執着がない、西洋人は基督教に依つて天國を教へられ、「死すること」を教へられて居るから、實は此世の執着は少ない筈だが實際はさうはいかぬ、それは恐らく餘りに人間的餘りに肉感的であるといふ人種の特徴に原因するのではあるまいか

タゴールが印度と西洋との比較論に従ふと、古希臘の文明は城壁（都會の地を圍繞せる）の中で養成せられた、爾來西洋の文明は悉く煉瓦と漆喰を搖籃として居る、彼等は此城壁に依つて人間界を自然界から分離さ

せた、而して此城壁が西洋人の心に深い極印を押しして仕舞つた、彼等は此城壁外のものを、凡て猜疑の目を以て視、若くは敵視するに至つた、自然は此の如くにして人間の敵と見做さるゝに至つたのである、然るに印度に於ては太古印度民族が移住し來つた時全國土は繁茂せる森林を以て掩はれて居た、此森林は彼等に家を與へ衣を與へ食を與へた、彼等は満足して此森林の中に生活した、印度の文明は此状態の下に生れたのである、即ち自然を搖籃として生れたのである、そこで彼等は自然を愛した、而して其自然の愛に依つて自己の意識を周圍に擴張し、遂に自然の大意識と一致融合するに至るてふ大理想を立てた、此大理想に到達せんとするの修業こそ印度古今の哲人の努むる所であるといふ(「生の悟了」第一章)

これはいかにも尤もな面白い解釋である、いかにも西洋人は自然を敵視して居る、自然を征服するなどいふ慣用語のあるに徴しても點頭かるゝ、偶ま郊外の小自然を愛する時でも猛獸の幼兒を愛するといふ風に愛するやうに思はれる、又アルプス、ヒマラヤの高嶺を攀ぢて得る彼等の快感は、矢張り猛獸を征服した時に感ずる快感であるかも知れぬ、兎も角我々が自然に對して起す嚴肅な快感とは異なるものがあるだらうと察せられる

要するに我々が西洋に入つて人間臭いと感ずる其感じの由來する處は大方こんな事であらうと思はれる

### 其 三

以上で西洋人の人間臭いいはれに對する私の解釋は終つたのであるが、こゝで私は又是非云ひ足さねばならぬ事がある

今迄書いた事で見ると、動もすれば西洋人は誦らぬ、西洋の文明はつまらぬなど、私が思つて居ると思はれさうに案せられる、が若しさう思ふ者があつたら大違ひである

いかにも西洋の文明にはかうした缺陷がある、其文明は今最高潮に達して居るが同時に行詰つて居る、自然に對する考を一變して別種の文明を建て直さねば、今に墮落崩壊して仕舞ふとも思はれるが、兎に角彼等の文明は有史以來の最大文明である、餘りに人間界に踰躋し過ぎて居るといふ弊はあるが、人間界を以て唯一の據城となし、其據城の完成に全力を盡した結果人間界で苟くも成し得る程の事は成して居る、先づ人間の研究は偉いものである、生理的に心理的に諸方面から研究してあるから狭い意味の生、人間本位より出發したる生といふものはよく營まれて居る、所謂生の充實といふやうなものは西洋人の生活で見られる、従つて個人對個人、個人對社會の關係、即ち交際術とか處世術とかいふものは實によく發達して居る、人と人との關係を攝理する爲めの法則が道徳ならば道徳も發達して居る——己れを持する爲めの道が道徳ならば、我々の方が概して云ふと一段高いかも知れぬ——所謂公德は我々と比較にならぬ程發達して居る、其外人間本位の生を豊富ならしむる爲めの機關は實によく發達して居る、科學の進歩も産業貿易の發達も内治外交の發達も皆此機關に外ならぬ、否な今日の西洋の文化國家の發展も悉く源を茲に發して居るのである、さればタゴールも、印度人は宇宙を以て即ち自然を以て家となし國となし財産となし、宇宙と融合し自然と同化するを以て理想となしたるが爲めに、現世の力といふものに戀々しなかつた、これ政治産業に於て失敗した理由であるが、西洋人は之に正反對である、是れ彼等が國家の發展富の増殖といふやうな方面に成功した所以であるやうの事を云つて居る

我々が今日孜孜として學びつゝある西歐の文明は實に此人間本位の努力に依つて出來た文明なのである、然らば人間本位の西洋流も決して猥りに排斥すべきものではない、併しそれにも拘らず、此人間本位の文明は間違のない恒久性の文明とは思はれぬ、之に處するの道は何うしたらよいであらう

よく大我小我といふことを云ふ、私はよく其意義を知らぬが多分小我とは人間としての意識で大我とは人間としての意識が擴充されて自然の大意識と一致したものと云ふのであらう、若し然りとすれば、我々の理想は次のやうな事であらねばならぬ、即ち常に大我の修業を忘れず、しかも小我の營みに努力すると云ふ事である、人間本位の文明は要するに此小我の營みである、恰かも我々は常に百年の計を持たねばならぬ、而かも今日の營みを棄てゝはならぬ、否な今日の營みこそ百年の計の基礎であると同様に、小我の營みは大我の發足であらねばならぬ、此の様にすれば西洋文明の缺點たる餘りに人間的餘りに肉感的といふやうな弊害も避けられると思ふ、それにつけても、我々に差當り必要なものは努力である

右のやうな見地より見れば印度の缺點は大我に馳せ過ぎて小我を餘りに閑却した事にある、西洋の欠點は餘りに小我に勤<sup>イシ</sup>み過ぎて大我を忘れたにあると思ふ、印度の亡國は誠に宜い龜鑑である、しかも西洋の隆盛には警戒すべき點がある

我々日本人は幸にも丁度兩者の中間にあるの資格を具へるやうに思ふ、東洋の大理想を解し、而かも西洋の物質文明を咀嚼し得るとは折々耳にする處である、恐らくこれは強ち自惚斗りでもなからうと思ふ、併し何事にもさうであるが我々は兎角物を小規模に具有する、完全になるべき素質を有しながら、それがどうも發展せぬ、良種の芽生は有して居るが、どういふものか鬱葱たる大木とならぬ、爛熳と開かざる中に荅のまゝ

で枯死しがちである

スキフトの「ガリバル旅行記」の中に小人島の記事がある、其小人島では歐洲諸國の制度文物を悉く備へて、人民も皆歐洲人の通りに舉動するのであるが何分人間が小さい、一時に足らぬ人間斗りて出來てゐるから、何から何迄が小規模なので、それが甚だ滑稽に感ぜられる、小規模といふものは如何に完全でも滑稽なものだといふ感を與へる

我々はどうか小人嶋になりたくないものである。